

# 学びの原点から、 未来へ

佐伯 胖

青山学院大学文学部教授

日本の子どもたちの「学力低下」が取り沙汰されている。だが、彼らの「勉強力」は決して衰えてはいない。低下しているのは、「学ぶ力」だ。「学ぶ」ということは、「わかりたい」という欲求に支えられている。「この「学ぶ力」を伸ばさずして、「勉強力」だけを強化しても、日本の教育はますます「再生」から遠のいていくことだろう。



Illustration : Akiyoshi Ito

## 「学び」という言葉

最近では「学び」という言葉は、むしろ「流行語」と言ってもよいぐらい広く使われている。しかし、私が1972年に『学びの構造』（東洋館出版社）を著したときは、「学び」という言葉は、ほとんど「なじみのない」言葉であった。この本は、私が米国留学を終えて帰国後、最初に出版した単著である。米国で「認知心理学」という新しい学問領域が生み出され発展して、後に「認知革命」といわれるようになった大きな変革の真つただ中に巻き込まれ、まさに当事者として考え、苦闘し、ある意味で古い心理学と「闘つて」きた経験をもとに、何か一冊の本を著したいと思つていたところ、村井実先生（現・慶應義塾大学名誉教授、当時・同大学文学部教授）のご推薦をいただいて、東洋館出版社から出版させていただいたものである。

原稿が仕上がったとき、村井先生に読んでいただいて、「先生、どんな題名の本にしましょうか」とお尋ねしたところ、先生はしばらくお考えになった上で、「そういうえば、九鬼周造という人の書いた『いきの構造』という本がある。それをまねてというわけではないが、『学びの構造』というのはどうかね」とおっしゃってくださいました。そのときの思いを正直に言えば、はつきり言つて「違和感」があった。「学び方」という言葉は広く使われていたし、「学ぶ」という動詞もごく普通に使われていたが、「学び」という名詞形を文書で目にしたことはほとんど無かつたからである。しかし、何となく格調の高い言葉だなと思ひ、また、博識の村井教授が名づけてくださったことでもあるので、その題名にさせていただきました次第である。

面白いものである。私自身が「学び」という言葉の意味を探求したのは、むしろ、その本を出した後からである。もちろん、私が『学びの構造』で主張していたことは、従来「学習」と呼ばれてきたことを、人間本来の最も人間的な営みとしての「学び」として、とらえ直すことであつたことは確かであり、村井先生はそのことを明確にとらえてくださった上で、『学びの構造』という書名を思いつかれたのだと思う。しかし、私

は、その「人間本来の、最も人間的な営みとしての学び」とはどのようなものかという問いを、それ以来、30数年経った今も問い続けている。

## 「学び」と「学習」

「学び」と「学習」は違う。「学習」というのは、心理学的に言えば、経験によって引き起こされる一時的でない行動の変容である。その変容が「望ましい」か「望ましくない」かは無関係である。変な習慣が身についたり、間違った考えにとりつかれたり、考えるべき事を「考えなく」なったりすることは——時に事故や災害をもたらしたり、いわゆる「不祥事」を引き起こしたりすることの原因になるのだが——すべては「学習」の結果である。そういう「間違つて学習してしまつたこと」を「解きほぐく」ことを、英語ではunlearningという。「脱・学習」とでもいふべきか。子安潤は『反・教育入門—教育課程のアンラーン』（白澤社）ではカタカナ書きで「アンラーン」とし、括弧付きで「学び捨て」という言葉を付しているが、私に言わせれば、「学び」を捨てているわけではなく、むしろ、あらためて「学んで」いる、あるいは「学び直して」いるのである。

つまり「学習」と違つて、「学び」というのは、はっきり「望ましいこと」を身につけることを指す。「学習」にはそういう価値志向性は想定されていない。

もつとも、この「望ましいこと」というのがなかなかやつかいである。本人は「望ましい」と思つていても、本当は「望ましくない」ことだつてある。こういう場合、本人は「学んで」いるのか、「学んでいない」のか。私としては、本人は「学んで」いるつもりでも、本当は「学んでいない」と言いたい。そうだとすると、「学び」における「望ましき」とはどういうことか、という問いが生まれるだろう。そこに何か特定の価値観や道徳性を押しつけるということとは、それこそ「望ましくない」。そこで、私たちは「学び」という言葉が価値志向的である、というにとどめるしかない。

「学び」というのは、村井実の言葉を借りると、人間の「善くなるうとする」「営みなのである（村井実『善さ』の構造』講談社学術文庫）。つまり、「学び」という言葉は、その背後に「何が本当に『望ましい』ことなのか」という、「善さ」を追い求めること——しかも、どこまでいっても「わ

かつたこと」にしてしまわずに、「もつと善いことはないか」と追求し続けること——が底流になければならないのである。その意味で、「学び」とは「学び続けること」なのである。

## 「わかる」「学ぶ」「覚える」

『学び』の構造が刊行された1972年というのは、ちょうど認知心理学が学問領域として確立し、その最盛期を迎えようとしている頃であった。認知心理学というのは、ひと言でいうと「わかること」の心理学である。それ以前の行動主義心理学が、学習を「行動の変容」としていたことに対し、認知心理学では学習を「理解の深まり」「ないし」「知識の獲得」とする。つまり、「学ぶこと」は「より深くわかること」ということである。

さて、研究の焦点を「わかる」ということにあててみてわかつてきたことは、人間がものごとをきちんと理解する（つまり「わかる」ということは、「大変なこと」だということである。私たちは膨大なまでの「既知知識」（すでに獲得されている知識）を持っているが、実はそれらの多くは、コンピュータ用語でいえば「バグだらけ」なのである。日常的経験を通して「勝手に作り上げている」知識（いわゆる「常識」）の多くは、誤解やカンチガイにあふれており、それらをまさに「アンラーン」（脱・学習）しなければ、正しい知識が獲得されないのである。しかも、それは単純に「反復練習」によつて頭に「たたき込む」ということでは解決しない。否、むしろ人間は「考えない」で済ませようとする強い傾向もあわせているので、面倒くさいことは「覚えちゃえばいい」という形で、手順や手続きを「丸暗記」してしまうということでも対処しようとするのである。

ところが、このように手続きを丸暗記して対処するクセが身につくと、「本当のことを、ちゃんと理解すること」が面倒になり、「わかること」へ向けての探求がおろそかになる。そうなると「新しい問題」への対処ができないし、状況や事態の変化に「臨機応変に対処する」ということができなくなる。結局、いつも「どうやればいいのか」だけを「教えてもらおう」ということに慣れてしまい、慣れ親しんだ世界のカプセルに閉じこもり、その中で「慣れ親しんだこと」だけをただ手際よくこなしているだけになってしまうのである。

## 「勉強」が「学び」を遠ざける

本来の「学び」は、「わかりたい」という欲求に支えられている。その「わかりたい」は、さらに「善く生きたい」という人間が生まれ落ちたときから持ち続けている「根源的衝動」とでもいうような、抑えても抑えきれない力に衝き動かされている。このことは、生まれてすぐの赤ちゃんを見ても、あるいは、夢中で遊んでいる幼児を見ても、疑う余地のないこととして認められる。赤ちゃんや子どもは、自分が「納得」するまで、とことん探求し続け、世界に働きかけ続ける。ところが、子どもが「学校」というところに行き始める頃から、どういいうわけか、「わかりたい」が「わからなくていい」になり、「不思議だ、どうなんだろう」が「カンケイナイ」にすり替わってしまうのである。

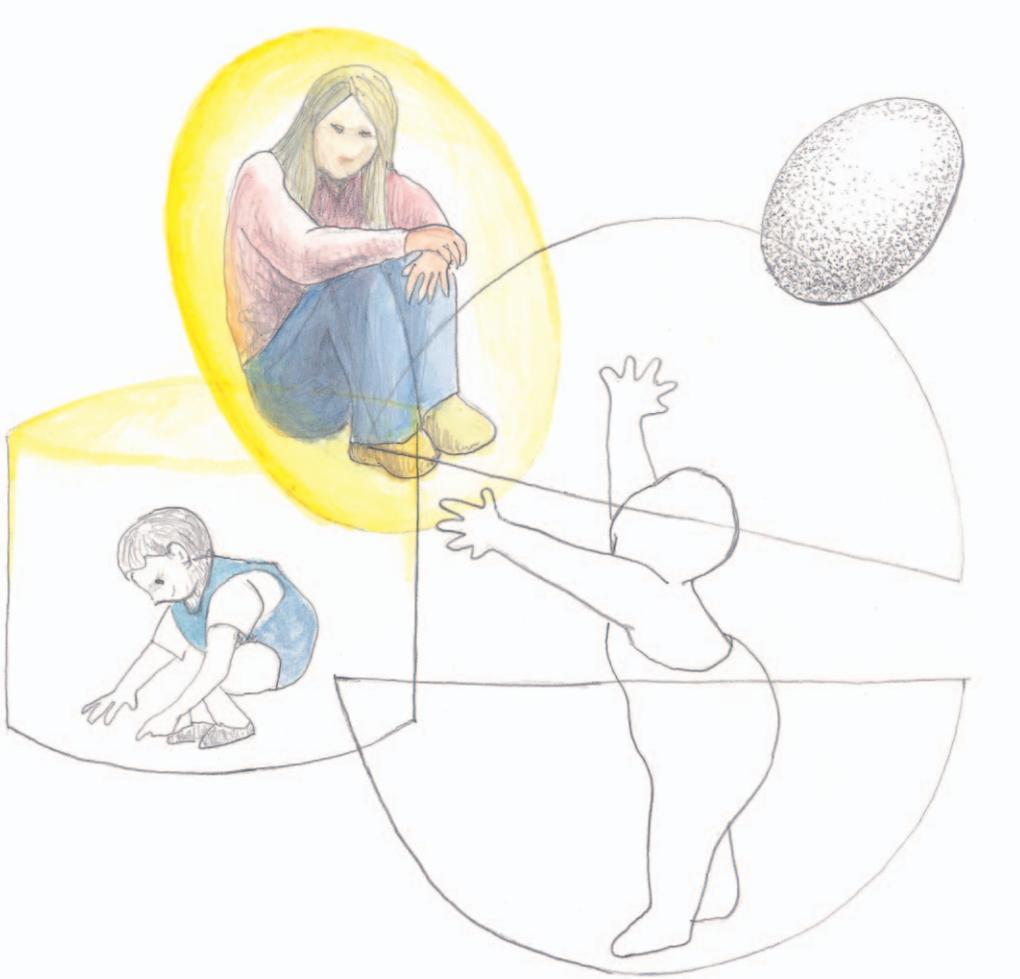
なぜそうなるのだろうか。

それは、学校では何をわかるべきかが学年別、学期別、教室別に「決まっている」からである。子どもが自分で「わかりたいこと」を追求するようになつていない。つまり、学校へ行く頃から、「学び」は「勉強」にすり替えられるのだ。「勉強」というものが、子どもの世界に無理矢理に入り込んでくるのである。

「勉強」というのは、学び手が「学びたい」からではなく、外から「習得すべき」として与えられることである。しかも、「結果主義」そのものである。つまり、「習得したか否か」が外的基準にあてはめて評価されるのである。要するに、「答え(正解)」が出せるか否かだけが問題にされる。「わかる」必要はない。「正解が出せる」ことだけが要求される。したがって、「答えの出し方」を丸暗記したものが勝ちとなる。「覚えちゃえばいい」「世界である。今、勝ちとなる」と言ったが、まさに「勝つか負けるか」の世界なのである。競わされ、順位づけられ、「勝ち組」になれるか「負け組」にされるか、それはひたすら「与えられた課題に正解を出す」「早さによつて決められるのである。そうなる」と考えているヒマはない。「わかる」とか「わからない」はカンケイナイ。

明らかに、「勉強」は「学び」を遠ざける。

これは、少しでも分別を持つて丁寧に考えれば、誰の目にも明らかなことである。



日本の子どもたちの「学力低下」が叫ばれているが、先に挙げた子安潤の『反・教育入門』が詳細なデータを挙げて明確に示しているように、「勉強力」(勉強によってつけた力)は世界的水準から見ても、以前から今日まで、日本はかなりの高水準を維持しており、それほど「低下」などしていない。むしろ、目に見えてどんどん低下しているのが「学ぶ」力である。自分から世界を探求し、意味づけようとする、要するに「わかる」とする「力がどんどん低下している。これを「基礎学力の強化」だとか、「外部評価の徹底」「学校間の競争」というような「勉強主義」の強化によって防ごうというのは、とてつもなく見当違いであり、明らかに逆効果である。

こういう「勉強主義」を「学び主義」に転換しようという動きが、従来「勉強主義」路線をひたすら走っていた中国や韓国の教育界で、最近広がり始めている。「わかることは面白い」、「自分で学びたいことを学ぶ」、「教室は教えあい、学びあう場だ」……こういうことが日常的に語られるようになってきている。「勉強主義」をひたすら強化して教育を再生させようというのは、国際的に見ても、日本だけが突っ走っている愚策としかいえない。日本の教育はますます「再生」から遠のいていく。

## 「善く生きる」ための「学び」

人はなぜ学ぶのか。それは、村井実の言葉を借りれば、「善く生きるため」である。この「善く」とはどういうことか。村井はそれを「効用性」、「相互性」、そして「無矛盾性」で構成され、それらを統合するものとしての「美」を追求することと説く(『善さ』の構造)。

まず、「効用性」ということから考えてみよう。端的に言つて「得をすること」を求めることである。もつと便利になる、もつと利益を得る、もつと繁栄する……こういう欲求がなければ、文明の発展はない。

以前、ドーキンスの「利己的遺伝子」論というのがやはり、生物の進化は遺伝子が自らとそのコピーを最大限に多く後生に遺すべく「利己的に」機能する結果、生存競争に有利に働く形質だけが継承されるのだ、とした。それはまた、「進化ゲーム論」という理論を踏まえて、遺伝子が生存をかけた「ゲーム」に勝つような戦略(そういう機能を生成する特質の選択)をとっているのだという話もある。また、サルからヒトに進化し

たのは、ウソも方便と使い分けて、うまく相手を打ち負かす、「マキャベリ的知性」のおかげだという「マキャベリ的知性仮説」なるものも結構はやった。このように、人類を進化させ、文明を發展させたのは、「利」を追求する「功利主義」原理のおかげだとすると、受験戦争に打ち勝ち、うまく「出世」し、「金持ちになる」ことを目指す「勉強主義」は全面肯定される。それこそが「生きる力」なのだ、と。

村井が提唱しているのは、「善く生きる」ことの側面として、「効用性」もあるということである。むしろ、「効用性」を無視したり、はつきりそれに反すること(「貧乏人は麦飯を食え」論は許されないこととするのである)。

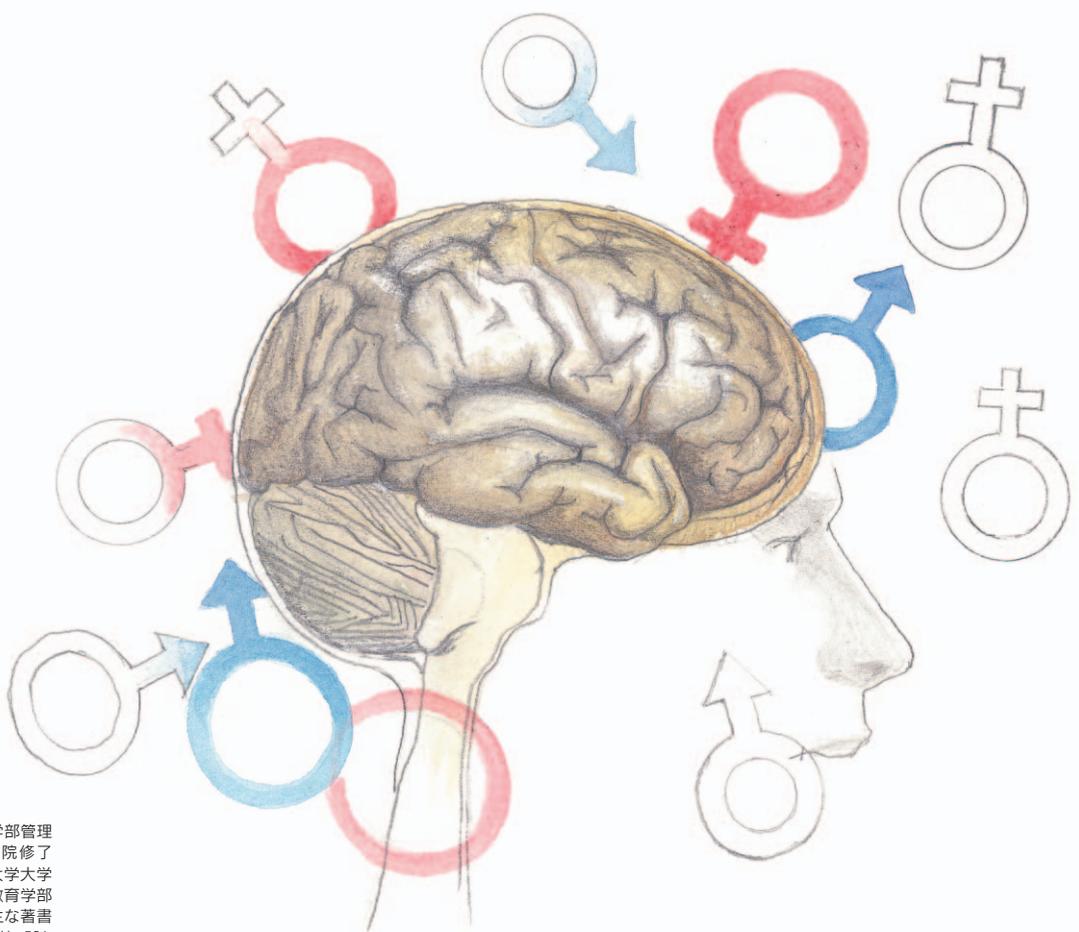
幸い、現在の進化論は、遺伝子の「利己性」ではなく、むしろ遺伝子相互の見事なまでの「協調性」を明らかにしている。単独の「遺伝子」が生物の特定の形質を決定しているわけではない。遺伝子グループのDNAが、さまざまな形質の発現を支える環境と複雑な相互作用を経て、環境との見事な「調和」が構成される。生物はそうにして進化し発展し、そして「発達」もするのである。

村井実が「相互性」と呼ぶ特性は、このことを意味していると解釈できよう。他者とかかわりあうこと、さらにそのかかわりあいを深めること、これを目指す特性が「相互性」である。「他者」と呼んだが、実はモノも含む。環境全体も含む。それらと「折り合いをつけて」、相手も死なない、自分も死なない、そういう方策を求めるのが「相互性」であり、今日の進化論は、進化がそのような「相互性」を高める方向に進化してきたことを明らかにしている。

3 番目に、「無矛盾性」について考えよう。

人間はどの段階かで「言語」を発明した。「言語」の発明は、それ以前に「シンボル」の発明に支えられている。「シンボル」はいわゆる「記号」や「数」を含む。こういうシンボルによって、人間は世界をモデル化することを知った。モデルを「動かす」ことで、予測や制御も可能となった。まさに宇宙の法則、原理を導き出し、それを利用して自然を「支配」する技術を生み出すようになった。

ところで、バロン・コーエンは人間の脳には「男脳」と「女脳」の2種類の特性があり、一般的には男性は「男脳」が優位に機能し、女性は「女脳」



さえき ゆたか

1939年生まれ。慶應義塾大学工学部管理工学科卒業、ワシントン大学大学院修了(Ph.D.)後、東京理科大学、東京大学大学院教育学研究科教授・研究科長・教育学部長、日本学術会議会員等を歴任。主な著書に、『「学び」の構造』(東洋館出版社)、『「きめ方」の論理』(東京大学出版会)、『認知科学の方法』(東京大学出版会)、『「学ぶ」ということの意味』(岩波新書)、『幼児教育へのいざない』(東京大学出版会)、『「学び」を問いつづけて』(小学館)など多数。

が優位に機能しているという。もちろん、実際には「女脳」が優位な男性もいるし、「男脳」が優位な女性もいるのだが(バロン・コーエン著 三宅真砂子訳『共感する女脳、システム化する男脳』(2005)日本放送出版協会)。「男脳」というのは、物事を論理的に追求し、システムでとらえようとする思考を司り、「女脳」というのは、他者への同情や共感、周囲の状況への配慮などを司っているとする。つまり、「男脳」はシンボル使用を巧みに扱う「無矛盾性」を追求する機能であり、「女脳」は周辺環境との調和を求め、相互作用を深め、高めるといふ「相互性」を追求する機能であるといえよう。

最後に、「美」について考えてみよう。

「効用性」、「相互性」、そして「無矛盾性」は、それぞれ、「善く生きる」ための機能特性であることは間違いないが、どれか一つに特化したり、どこかが肥大化したり、逆に「萎縮」したりすると、これは明らかに「善く」ない。それでは、これら全体が調和して統合されることを求める感覚はなんだろうか。それが「美」なのである。「いびつさ」は「醜い」。絶妙なバランスが生まれたとき、「美しい」といふ。「学び」を失い、勉強主義の競争社会で格差を増大させる最近の日本の風潮は、美しいか。否、醜い) 「美」を追求するとき、既存の「効用性」、「相互性」、そして「無矛盾性」すらも、一時的に否定したり、ゆさぶりをかけたりすることがある。それは過去におけるさまざまな芸術運動を振り返れば、明らかである。そのような試みを通して、新しい「効用性」の意味、新しい「相互性」の意味、新しい「無矛盾性」の意味を追求するのである。そういう「新しい意味」の創造の感覚(センス)を磨くのが美の世界であり、芸術の世界である。

「学び」の再生を目指して

未来に向けて今、私たちが本当に取り組まなければならないのは、「教育」の「再生」ではない。子安潤は現在の日本の教育において最も必要なのは「反・教育」であり、「教育」の「アンラーン」であるという。

私があえて付け加えるならば、それは「学び」の再生である。我が国の未来、否、人類の未来は、そこにあり、またそこにしかない。